

## 諏訪之瀬島の火山活動解説資料

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引下げ＞

御岳<sup>おたけ</sup>火口では、2020年12月29日以降、火口から1kmを超えて飛散する大きな噴石は観測されていません。また、傾斜計やGNSS連続観測による地殻変動データに、大きな変化はみられていません。

このように、諏訪之瀬島では御岳火口から1kmを超え、概ね2km以内の範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低下したと考えられます。

以上のことから、本日（14日）11時00分に火口周辺警報を発表して、噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引き下げました。

一方、噴火活動は継続しており、今後も火口から概ね1kmの範囲では、大きな噴石が飛散する可能性があります。

### 【防災上の警戒事項等】

御岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### ○ 活動概況（図2～5、表1）

御岳<sup>おたけ</sup>火口では、2020年12月29日以降、火口から1kmを超えて飛散する大きな噴石は観測されていません。29日以降、弾道を描いて飛散する大きな噴石は最大で火口から400mまで達しました。また、12月21日から29日にかけて爆発が増加しましたが、その後、爆発回数は減少しています。

GNSS連続観測では、島内の基線で2019年12月頃から、わずかな伸びがみられていましたが、2020年9月頃から停滞しています。傾斜計のデータでは、大きな変化はみられていません。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁が実施した観測では、2020年12月以降、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、12月26日に2,500トンと一時的に多い状態となりましたが、その他の日は概ね1,000トン前後で推移しています。1月6日の観測では1日あたり1,300トンとやや多い状態でした。

このように、御岳火口から1kmを超え、概ね2km以内の範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低下したと考えられますが、引き続き概ね1kmの範囲に影響を及ぼすような活発な噴火活動が継続しています。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（[https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vaect.php](https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vaect.php)）でも閲覧することができます。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学及び十島村のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、同火口から南南西4kmの集落で、噴火に伴う降灰が時々確認されています。

夜間に高感度の監視カメラで火映を時々観測しています。

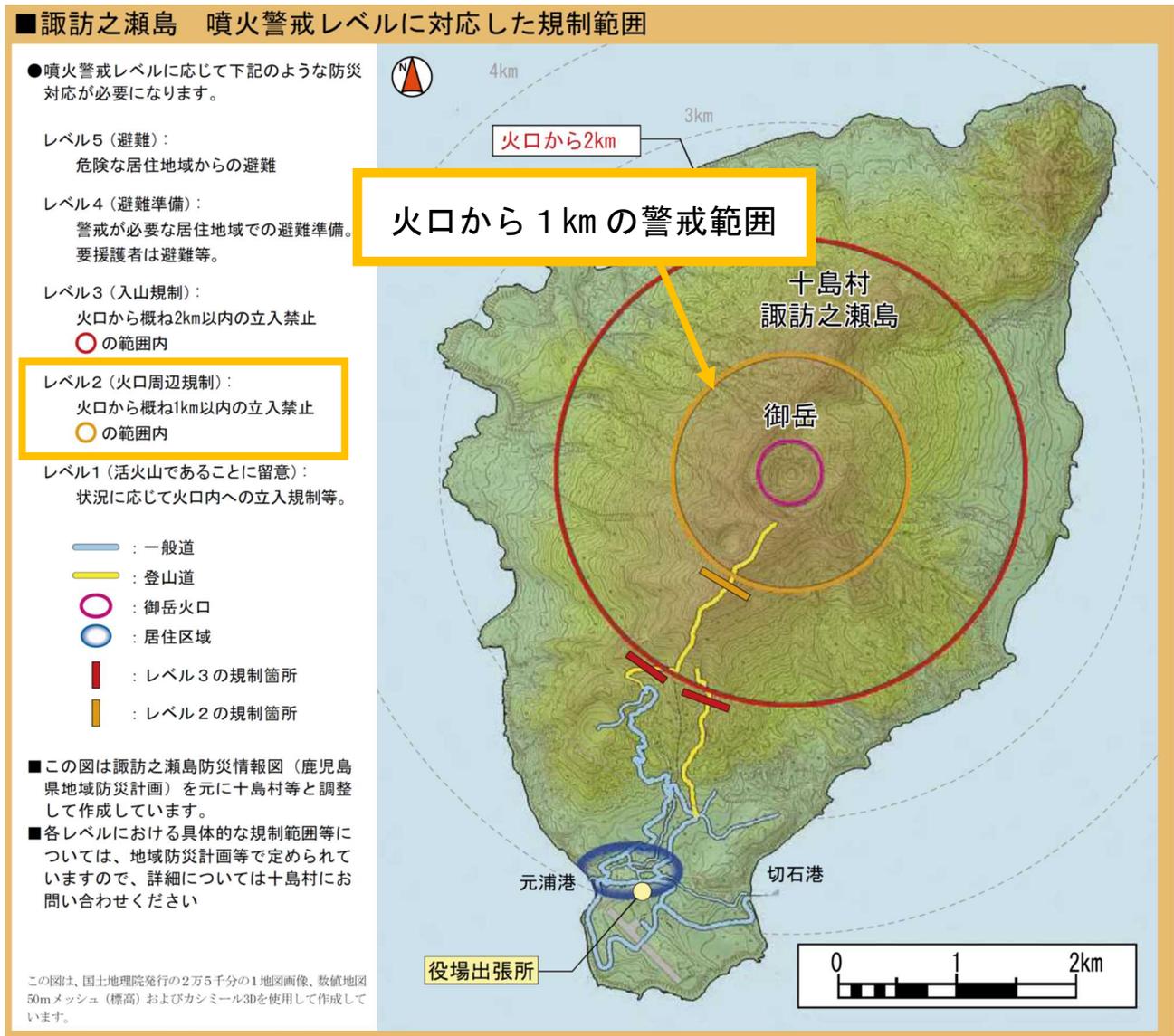


図1 諏訪之瀬島 警戒が必要な範囲

御岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

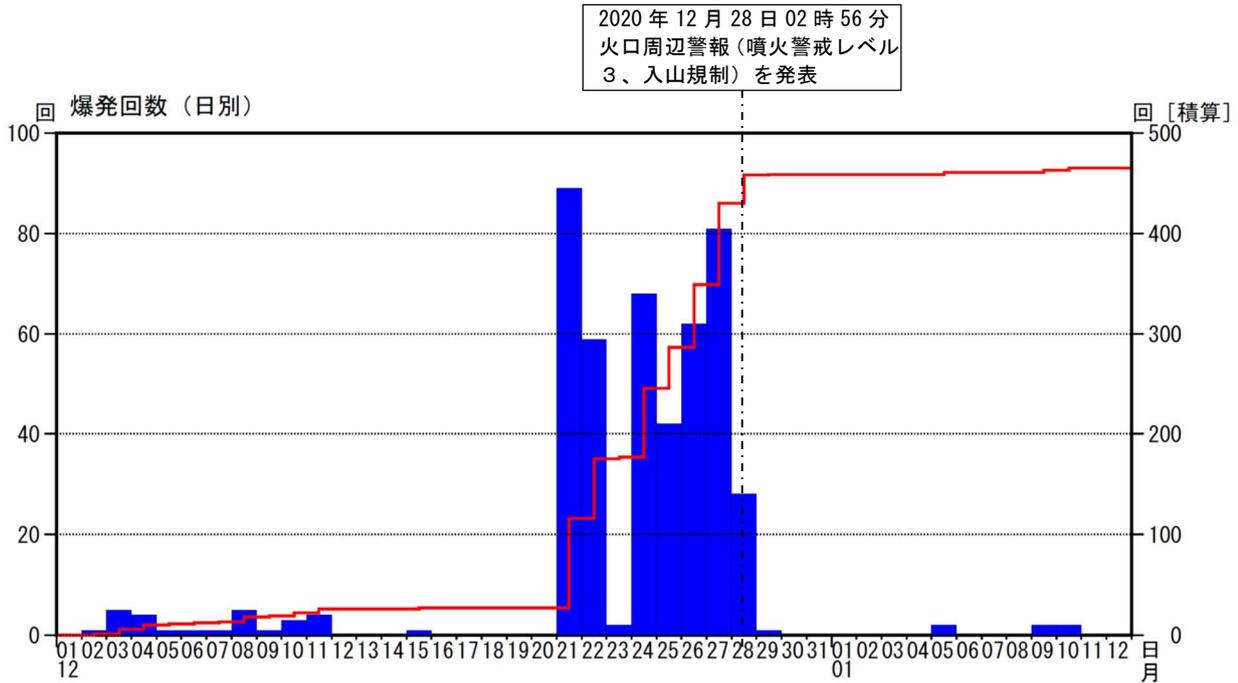


図2 諏訪之瀬島 爆発の日別回数と積算回数 (2020年12月1日～2021年1月12日)  
2020年12月21日から29日にかけて爆発が増加しましたが、その後、爆発回数は減少しています。

表1 諏訪之瀬島 爆発の日別回数及び爆発と噴火に伴う大きな噴石の日最大飛散距離  
(2020年12月28日～2021年1月12日)

	2020年12月28日	29日	30日	31日	2021年1月1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日
爆発回数 (回)	28	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	2	0	0
噴石飛散距離 (m)	1300	-	-	-	-	-	-	200	400	300	200	-	400	200	200	-

2020年12月29日以降、火口から1kmを超えて飛散する大きな噴石は観測されていません。29日以降、弾道を描いて飛散する大きな噴石は最大で火口から400mまで達しました。

表中の噴石飛散距離は、爆発及び噴火に伴って弾道を描いて飛散する大きな噴石の飛散距離の日最大値を示しています。また噴石が観測されなかった場合は「-」としています。



図 3-1 諏訪之瀬島 噴火の状況（1月13日、キャンプ場監視カメラ）  
御岳火口では、引き続き活発な噴火活動が継続しています。



図 3-2 諏訪之瀬島 噴火の状況（1月9日、キャンプ場監視カメラ）  
夜間に高感度の監視カメラで火映（白閃）を時々観測しています。

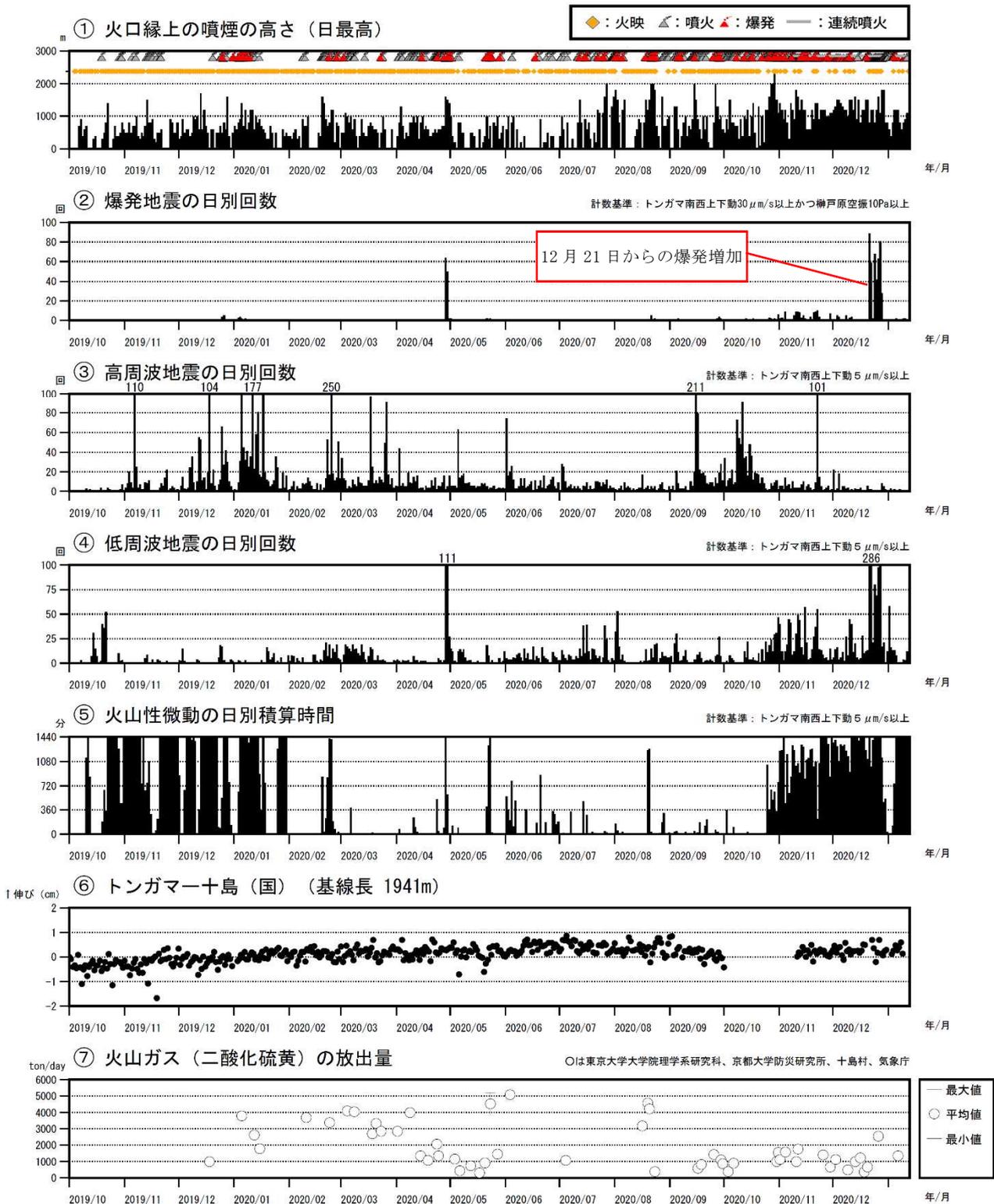


図4 諏訪之瀬島 最近の火山活動経過図（2019年10月～2021年1月12日）

- ・2020年12月21日から29日にかけて爆発が増加しましたが、その後、爆発回数は減少しています。
- ・火山性微動は主に噴火に伴って発生しています。
- ・GNSS連続観測では、島内の基線で2019年12月頃から、わずかな伸びがみられていましたが、2020年9月頃から停滞しています。
- ・2020年12月以降の観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、12月26日に2,500トンと一時的に多い状態となりましたが、その他の日は概ね1,000トン前後で推移しています。1月6日の観測では1日あたり1,300トンとやや多い状態でした。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁は2019年12月より火山ガス（二酸化硫黄）放出量の観測を始めました。

トンガマ南西観測点の地震計の機器障害により、ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。

⑥の基線は図5の①に対応しています。

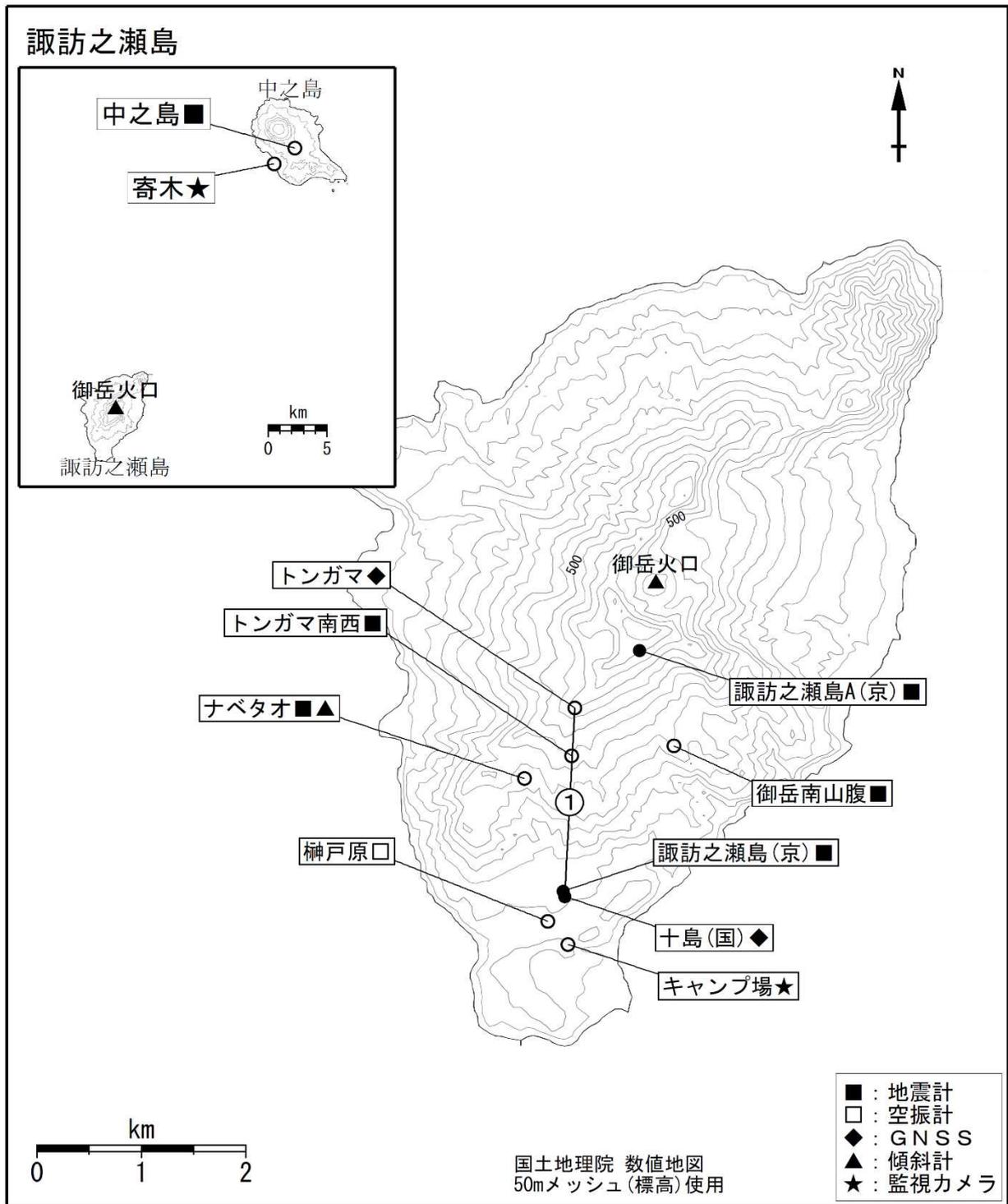


図5 諏訪之瀬島 観測点配置図とGNSS連続観測による基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
(国): 国土地理院、(京): 京都大学